

「センカクアホウドリ」発見記



アホウドリのつがい（左2羽）とセンカクアホウドリの雌（右2羽）。[撮影：今野美和]

北海道大学総合博物館の江田^{まさき}真毅准教授らと山階鳥研の研究チームは、最近、鳥島で繁殖する「アホウドリ」と、尖閣諸島で繁殖する「センカクアホウドリ」は別種であることを明らかにしました。江田准教授と、富田直樹山階鳥研保全研究室研究員に、いかにして両者が別種であると考えられるに至ったのか、その経緯を紹介していただき、保全、研究を含めた今後の課題についてお話しいただきます。

【日時】 11月6日（土）13：30-15：30（YouTubeライブ配信）

11月6日（土）17：00-11月7日（日）24：00（録画による再配信）

【場所】 オンライン開催

※ジャパンバードフェスティバル2021のウェブサイト
(www.birdfesta.net)にあるリンクからお入りください。

【参加方法】 申込不要、費用無料

【主催】 我孫子市鳥の博物館・（公財）山階鳥類研究所

講師プロフィール



えだまさき
江田真毅（北海道大学総合博物館・准教授）

筑波大学人文学類で考古学を、東京大学大学院農学生命科学研究科で生態学を、九州大学大学院比較社会文化研究院で分子生物学を学び、鳥取大学医学部では解剖学教育に携わる。現職での担当は考古学。各分野の視点・手法を取り入れながら、主に遺跡から出土した鳥の骨を研究している。2015年日本鳥学会黒田賞受賞。



とみたなおき
富田直樹（山階鳥類研究所保全研究室・研究員）

長崎大学水産学部でキタオットセイの母子間の音声コミュニケーションや繁殖生理の、大阪市立大学大学院理学研究科でウミネコの母性効果に関する生理生態の研究に携わる。現職では、環境省モニタリングサイト1000海鳥調査やアホウドリ保護増殖事業を担当し、日本で繁殖する海鳥のモニタリングに従事している。

「センカクアホウドリ」発見記

～ きっかけは考古鳥類学

講師：江田 真毅

北海道大学総合博物館 准教授

アホウドリは翼を広げると2メートルを超える北太平洋最大の海鳥です。現在、伊豆諸島・鳥島と尖閣諸島で主に繁殖する危急種で、国の特別天然記念物でもあります。昨年、私たちは、鳥島と尖閣諸島のアホウドリは別種であるとの論文を発表しました。そして、アホウドリの代名詞となってきた鳥島の集団を「アホウドリ」、尖閣諸島の集団を「センカクアホウドリ」と呼ぶことを提案しました。

アホウドリが2種からなることを発見したきっかけは、北海道礼文島の浜中2遺跡から出土した骨の分析でした。遺跡から出土した骨は、土器や石器と同様、過去の人々が残した遺物です。その分析から、人々がどんな動物を利用したのか、どの時期にどこで獲物を捕らえたのかなど、過去の人類の活動を復元できます。このような学問領域は考古学のなかでも動物考古学と呼ばれます。一方、遺跡から出土した骨は、動物の死体の一部です。骨の形態や組織、DNAなどを調べることで、その動物の過去の分布や形態の変化など、当時の動物の生態が復元できます。考古動物学、鳥類に限定すれば「考古鳥類学」と呼べる（私が呼び始めた）学問領域です。

浜中2遺跡が位置する礼文島周辺の日本海やオホーツク海には、現在アホウドリを含むアホウドリ科はほとんど分布していません。しかし、浜中2遺跡からはその骨が大量にみつけられました。謎の海洋狩猟民・オホーツク人が残した約1,000年前のものです。私の研究は、なぜオホーツク人はたくさんアホウドリ科の骨を浜中2遺跡に残したのか？の動物考古学的な探求から始まりました。オホーツク人の活動域の推定を目的とした骨のDNA解析によって、分析に成功したすべての骨がアホウドリのものであることが分かりました。このことは、北太平洋に生息するアホウドリ科のうち、もっとも沿岸性のアホウドリをオホーツク人が主に利用していたことを示すものと言えます。同時に、考古鳥類学的にはアホウドリが礼文島周辺に分布していたことが分かりました。さらに、これらの骨の分析から当時のアホウドリに2つの集団があったことも分かりました。この知見は、現在のアホウドリを対象としたDNA解析がもたらした謎—鳥島と尖閣諸島のアホウドリは、長期間隔離されていた別の集団なのか？それとも、もともと1つの大きな集団だったのか？—を解明する鍵となりました。「センカクアホウドリ」の発見に考古鳥類学がいかに貢献したのか？をご紹介します。

「センカクアホウドリ」発見記

～ 決め手は鳥類生態学

講師：富田 直樹

(公財) 山階鳥類研究所 保全研究室研究員

アホウドリの最大繁殖地である伊豆諸島・鳥島では、1949年にアホウドリの「絶滅」が宣言されました。しかし、2年後には島の南側にある燕崎でアホウドリが再発見され、その後、1970年代後半から長谷川博氏や山階鳥類研究所らの保全活動によって、雛数や飛来する個体数が増加し、2021年には6,500羽以上まで回復しました。これまで1種とされていたアホウドリですが、私たちの研究グループは、この中にもうひとつの繁殖地である尖閣諸島から来たアホウドリが含まれていること、さらに2つの集団は別種であることを明らかにし、鳥島の集団を「アホウドリ」、尖閣諸島の集団を「センカクアホウドリ」と提案しました。

鳥島で尖閣諸島から飛来したアホウドリが発見されるきっかけは、足環による標識調査でした。鳥島では1979年以降、巣立ち前の全てのアホウドリの雛に足環標識を行っているため、足環がない個体＝尖閣諸島から飛来したアホウドリと推測できます。1992年から2006年まで行われた通称「デコイ作戦」(アホウドリのデコイと音声を用いて島西側の初寝崎に新繁殖地を形成するプロジェクト)で、1羽のアホウドリが注目されるようになりました。毎年繁殖期に鳥島に来ては、特定のデコイに求愛し続けるこの個体は、作戦を指揮した山階鳥研の佐藤文男氏らに(悲恋の)「デコちゃん」と呼ばれました。実はデコちゃんには足環が付いておらず、尖閣諸島から飛来した可能性が浮上し、調査員を驚かせました。その後、足環のないアホウドリの数は増加し、繁殖も確認されるようになりました。さらに、足環のないアホウドリは、鳥島のアホウドリに比べて全体的に小柄で、頭からくちばしがややほっそりしていることが、詳細な観察から明らかになりました。

鳥島と尖閣諸島の集団は、生態的にどのような違いがあるのか？私たちは、これまでの行動観察に加えて、実際にアホウドリを捕獲し、形態計測やデータロガーによる利用海域の推定など様々な生態学的手法を用いてこれらの難題に挑みました。本講演では、これまで一つの保全単位として保全活動が行われてきたアホウドリの今後を左右する発見が、どのように成されたか、現場での工夫や苦労も交えて紹介します。